神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Fichte-Club and Herbart (1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2005-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 精一, Sugiyama, Seiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/698

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

フィヒテ・クラブとヘルバルト（1）

～1790年代後半のイエナの若者たち～

杉　山　精　一

「ベルガーとヒュルゼン，そして遠くにいる友人たちが，
私の唯一の社会です。[1]」
（1796年9月，リスト宛てのヘルバルトの書簡から）

1．ドイツ思想の源流　～1790年代後半～

1988年，ボーフム大学で1800年前後のドイツ哲学をめぐるシンポジウムが開催された。研究者たちの視野に収まったのは1795年から1805年までである。シンポジウムは，このわずか10年の間に噴出した知の運動を，フランス革命に対するドイツにおける知の革命として「美的革命」と見なし，さらに「近代の自覚」とともに「近代の超克」をも含む豊穣な論争の場として位置づけている。[2]

このシンポジウムでも指摘されているように，まさにこの10年は新たな知の運動がドイツにおいて生まれ醸成された時代であり，今日においても，常に新たな問い直しが試みられるドイツ思想の源流である。

教育思想においてはどうだろうか。

ドイツ教育学の伝統を担った人物たち，例えばディルタイ，ノール，W．フリットナー，ボルノウなどにおいても，この時代との接点を探すことはさほど困難なことではない。例えばディルタイは，シュライエルマッハー研究，さらに1790年代の若きヘーゲルをその視野の中心に据えながら「生の哲学」

を形成してゆく。[3]

また，W．フリットナーの学位論文は，ヘルバルトがイエナ大学で深い交流を重ねたヒュルゼンである。ヒュルゼンはシェリング，シュレーゲル兄弟，シュライエルマッハーとも親交のあった人物であり，フィヒテ哲学と格闘していたヘルバルトに，シェリング研究のきっかけを与えた人物でもある。[4]

またヒュルゼンと最も親しき友人であったベルガーは，ヘルバルトと繰り返し哲学的議論を重ねた人物であり，フリットナーによればドイツにおける田園教育の創始者である。[5] ドイツ教育思想もまた，このわずか10年の間にドイツで花開いた思想状況に，その源流の一端をたどることができる。

先のシンポジウムで議論された時代を，ヘルバルトもまた共有しているとすれば，そのとき彼は何を感じ，何に悩み，何をめざし続けたのだろうか。今回はその時代を基点に据えながら，「フィヒテ・クラブ」で活動した若者たちの足跡と，ヘルバルトとの関係について若干の報告を試みたい。

2．イエナ大学入学と「フィヒテ・クラブ」での活動

1794年5月19日。フィヒテは32才の誕生日にイエナに到着する。1週間後の5月26日には知識学の講義を始め，その情熱的な活動は多くの学生たちを惹きつけた。[6] このイエナへのフィヒテ就任から，1799年に彼が無神論論争でイエナを去るまで，彼の周辺には多くの才能あふれた若者たちが集い，議論し，友情を深め合った。「フィヒテ・クラブ」の誕生である。[7]

1794年10月20日，ヘルバルトはイエナ大学に入学した後，この「フィヒテ・クラブ」（以下，クラブと略記）のメンバーとの交流を通じて，思索を深めていく。この集団の活動は，大学入学直後の若きヘルバルトにきわめて多くの精神的な啓蒙を与え，やがて彼はこの集団における中心的な人物のひとりとみなされるようになる。

3．ヘルバルトとメンバーたちとの関係

1790年代後半，知の発信地はイエナであった。[8] ゲーテ，シラー，フィヒテ，シェリング，シュレーゲル兄弟，ヘルダーリン。文学と哲学の巨人たちの精神は，このイエナを経由して発信されていた。それは同時に，若きヘルバルトがイエナ大学でフィヒテと出会い，様々な友人たちとの交流を通じて自らの思想を形成していった時代でもある。その活動の場がクラブであった。

ヘルバルトとメンバーとの関係については，当然彼らが影響を受けた様々な思想状況との延長線上にある。それは，文学，芸術，哲学，政治，自然科学，教育など1790年代の思想状況につながっている。加えて，フィヒテの絶対的自我をめぐる立場とともに，そこにつながる様々な人間関係が微妙に関係している。

以下，彼らの歩んだ足跡とともに，ヘルバルトとの関係について整理してみよう。なお，ここで取り上げる人物はクラブのメンバーの中で，とくにヘルバルトと交流を持っていた人物に限定している。[9]

(1) 文学　～エッシェン，グリース，ベーレンドルフ～

① エッシェン（Friedrich August Eschen, 1776—1800）

不運な事故で亡くなった，才能豊かな若き詩人。

1796年4月21日にイエナ大学に入学し，この年の終わり頃にクラブに入会する。ヘルバルトは彼とソフォクレスを読むのを楽しんでいた。エッシェンは，シラーの創刊した雑誌『ホルン』と『文芸年鑑』の寄稿者であった。1800年にはホラチウスの叙情的な詩を翻訳して出版している。ヘルバルトが家庭教師を辞めた後，ツィームセンと共にスイスに行き家庭教師を引き継いでいる。だが1800年7月，彼は友人のツィームセンと共にスイス山中を徒歩旅行していたとき，氷河の深い裂け目に転落して命を落とす。ツィームセンはこのときの状況を，悲しみに満ちた書簡でブレーメンに滞在していたヘルバルトに

書き送っている。[10]

彼は，ヘルバルトの友人の中で，最も文学的才能に恵まれた友人である。彼のスイス行きはヘルバルトが家庭教師の後任として招いたものであり，ヘルバルトの悲しみは察するにあまりある。1797年6月30日の書簡で，彼はヘルバルトを慕ってスイスに行きたいと述べ，「夕立ち」と題する詩をヘルバルトに書き送っている。またシェリングの自然哲学にも深い関心を寄せ，ヘルバルトに感想を求めている。[11] ヘルバルトに宛てた彼の書簡は，友情に満ちあふれたものであり，ヘルバルトを深く慕っていたことがわかる。彼は，いくつもの詩をヘルバルトに送り，その詩作活動を通じてヘルバルトとの友情を深めていた。

② グリース（Johann Diedrich Gries, 1775—1842）

ハンブルク出身の文学者，翻訳家。父親は市参事会員。
18才から商人としての修行に励むが，父親から大学入学を許可され，法学研究のために1795年10月にイエナ大学に入学する。彼は社交術とピアノの才能に恵まれており，様々なサークルで人脈を広げる。例えばリスト，ヘルバルト，アウグスト・ヘルダー，エッシェン，ヒュルゼン，ベルガー，ノヴァーリス等である。またゲーテ，シラー，ヴィーラントとも交流を深めた。彼はフィヒテの講義を聴講していたが，その抽象的で厳密な哲学体系になじめず，文学活動（詩）に関心を持つようになる。

1797年3月にハンブルクを訪れ，ヤコービと知り合う。またこの年の夏には，カロリーネ・シュレーゲルとドレスデンに行き，シュレーゲルの所でシェリングを知る。グリースの書簡からは，シェリングがいかにグリースを熱狂させたのかを確認できる。さらにシェリング・サークルでティークを知る。その後イタリアの詩人タッソー（1544-1595）の翻訳家として活躍する。[12]

彼はメンバーの中で，最も華麗な人脈を持つ友人である。ヘルバルトが1797年3月にイエナを離れてスイスに向かった後，クラブの中心メンバーと

して活動の中核を担っている。

また，グリースはフィヒテが無神論論争に巻き込まれている頃，ヤコービがフィヒテに宛てた書簡の重要性に気づき，それを書き写してヘルバルトに送っている。[13] 古典派のシラーだけでなく，初期ロマン派の人々やシェリングからも認められ，交流を深めていることは興味深い。

③ ベーレンドルフ（Casimir Ulrich Böhlendorf, 1775—1825）

放浪と漂白の人生を送った抒情詩人。

1793年にギムナジウムで法学を学んだ後，研究を続けるために1794年イエナ大学に入学する。1795年7月2日にクラブに入会し，フィヒテや歴史家のヴォルトマンと親しく交流する。彼はフィヒテの知識学を受講するがなじめず，次第にフィヒテから離れ文学活動に関心を示していく。

1797年3月，ヘルバルトがスイスに旅立つときに同行し，一時ヘルバルトと共にシュタイガー家の家庭教師職につくがすぐに辞退し，その後イタリア旅行の後，12月にベルンに移り住んでいる。このころますます文学的活動にのめり込み，悲劇研究や詩作活動を試みている。1798年のスイス革命に遭遇し，『ヘルヴェチア革命史』を著す。1799年にはドイツに戻り，友人ムアベックの仲介でヘルダーリン，ジンクレアと知り合う。

その後彼の作品は次第に認められるようになるが，シラーによってその作品が批判され，深く傷つくと同時にドイツ文学史の傍流へと追いやられる。その後，歴史家ヴォルトマンの私設秘書となり戯曲を書き続けるが，1803年頃から次第に精神病理学的症状を見せ始める。混乱した精神状態の中で放浪を続け，1825年に亡くなる。その人生の軌跡は，友人ヘルダーリンを想起させる。[14]

彼は，ヘルバルトと共に一時期スイスで家庭教師をした人物である。また，ホンブルク滞在期に，ヘルダーリンにヘルバルトの書簡を紹介している。[15]

(2) 哲学 ～ヒュルゼン，ベルガー，ムアベック，ケッペン～

① ヒュルゼン（August Ludwig Hulsen, 1765—1810）

クラブの中では最も年長で，哲学的遍歴を続けた人物。

説教師の息子としてポツダム近郊で生まれた彼は，ハレ大学で研究した後フィヒテの講義を聞くために1794年イエナ大学に入学する。1797年までフィヒテの熱心な信奉者としてクラブのメンバーとともに活動した。1798年にベルガーと共にスイスに旅行した後，1799年にはある村で子どもたちのための教育制度を作り，ロマン主義的な教育学を試みている。ただ1年後には妻の死によってこれを放棄している。

彼は1796年，ベルリン科学アカデミーの懸賞論文執筆によって認められ，その後シェリング，シュレーゲル兄弟，ティークなどの初期ロマン主義者たちと交流を深めていく。またシュライエルマッハーとも親しく交流している。

ヒュルゼンは，ヘルバルトがシェリング研究に向かうきっかけを作った人物である。1796年6月，ワイマールに旅行に出かけ，ヘルバルトは彼と共に充実した時間を過ごしている。[16]

② ベルガー（Johann Erich Berger, 1772—1833）

生命哲学を探究した哲学者。

コペンハーゲンで法学を修めた後，ゲッチンゲン，キール，イエナで研究を続け，再びキールで歴史，国家学，自然科学，数学，哲学を研究した。1796年から1797年のある時期，彼はヒュルゼンと共にスイスで田園生活をしていた。1800年にコペンハーゲンにもどるが，すぐにキール近郊に土地を買い，世俗を離れた田園生活を送る。1808年にキール大学の天文学と哲学の教授に任命され，1832年から死の直前まで学長を務める。

彼は，ヘルバルトと哲学的議論を重ねた数少ない友人であり，ヒュルゼンの親友でもあった。

③　ムアベック（Friedrich Phillipp Albert Muhrbeck, 1775—1828）

グライフスバルト（Greifswald）出身の哲学者。

1792年グライフスバルト大学に入学して哲学の学位を取り，哲学博士として1796年４月30日にイエナ大学に入学する。1800年からはグライフスバルト大学で哲学講義を行い，それ以外にも論理学，人間学，心理学，自然法などを講義する。学問への深い愛，思弁的な精神の豊かさを持った優れた哲学者であったと言われている。またシェリングやヘーゲル，アルントとも交流があった。

ヘルバルトと哲学的議論を交わした最も重要な友人である。彼はイエナ大学に入学したとき，すでに哲学博士であった。1797年６月頃，彼はヘルバルトとヤコービをめぐる哲学的状況について議論している。[17]

④　ケッペン（Karl Friedrich Köppen, 1775—1858）

リューベック生まれ。シェリングを批判し，ヤコービの優位性を主張し続けた哲学者。

1793年イエナ大学に神学生として入学し，翌年の11月26日にヘルバルトとともにクラブに参加している。1796年１月にゲッチンゲンで研究を続けるためにイエナを離れている。その後一貫してヤコービの哲学的立場を擁護し続ける。1804年にブレーメンで牧師になった後，ヤコービの推薦でランドシュット（Landshut）大学に招かれ1826年にはエアランゲン（Erlangen）大学に移っている。1819年にヤコービが亡くなったとき，中断してしまった彼の著作集の出版を引き受け，1825年に完結させている。一貫してシェリング批判の立場を貫き，ヤコービを支持し続けた哲学者である。

書簡では，ケッペンとのやりとりやヘルバルトとの交流を示唆する箇所は，ほとんど見いだすことができない。ただ，1797年７月のシュミットのベルン行きに同行し，ヘルバルトと会っている。[18]

(3) 政治 ～シュミット，リスト，シュテック，フィッシャー～

① シュミット(Johann Smidt, 1773—1857)

ブレーメン出身の政治家。

牧師の息子として生まれる。神学研究の後1792年の復活祭にイエナ大学に入学し，ラインホールトとパウルスの影響を受ける。1794年にフィヒテがイエナに招聘されると，彼と友情にあふれた親交を結ぶ。1795年の秋にブレーメンに戻り，1797年の6月頃にスイスにいる友人たちを訪ねる。同年，ブレーメンのギムナジウムの哲学教師に任命される。

1799年『ハンザ雑誌』を創刊し，ハンザ諸都市の独自性を模索する活動を展開する。1800年にブレーメンの上院議員に選出されてから，政治家として頭角をあらわす。1821年4月26日にブレーメン市長に選出され，激動の時代の中で，ハンザ諸都市の独自性の確保に尽力する。1830年，周囲の反対を押し切り一大事業であるブレーマーハーフェンを開港させ，ブレーメン経済繁栄の基礎を築く。

1846年市長就任25周年記念祭が行われ，市役所ホールに彼の立像が建立されることが決議される。(彼の希望で展示されたのは彼の死後であった) ハンザ同盟都市の政治家たちの中で，このような彫像が建てられたのは彼だけである。1873年には，生誕百年祭が行われる。政治的激動期であった19世紀前半のドイツを生き，貢献してきた彼の政治家としての意義については，歴史的にはなお明らかにされていない。

彼は，クラブ創設に関わった最も重要な中心メンバーの一人であり，ヘルバルトと終生の友情を持ち続けた政治家である。ヘルバルトは，1795年の9月にドレスデンに4週間の旅行に行っており，そこでシュミットと始めて個人的な親交を結んだ。彼はこのとき，シュミットに哲学研究を続けていきたいこと，法学研究を続けパンを得るための学問を続けることを願っている母親を説得してほしいと頼んでいる。その後シュミットは，ヘルバルトの母親と頻繁に書簡のやりとりをしながら，1796年の4月初めにオルデンブルクに

ヘルバルトの両親を訪ね，このときの約束を果たしている。母親が，シュミットに絶対的な信頼を寄せていたことは書簡からもうかがうことができる。

② リスト（Johann Georg Rist, 1775—1841）

ハンブルク出身の外交官。

ハンブルクのギムナジウムに通った後，1795年の復活祭に法学研究に打ち込むためにイエナ大学に入学する。ここで彼は，ベルガー，グリース，ヘルバルト等と親交を結ぶ。一年間イエナで学んだ後，キール大学に移っている。その後彼はペテルスブルクにあるロシア公使館秘書官に任命され，ベルリン，マドリード，ロンドン，ハンブルク，キールなどで外交官として活動した。

ヘルバルトと精神的な交流を深めた友人である。リストがキールに移ってからも，ヘルバルトは友情にあふれた書簡のやりとりをしながら，リストと交流を続けている。自ら作曲した作品をリストに捧げていることからも，その交流の深さが伺われる。[19]

③ シュテック（Johann Rudolf Steck, 1772—1805）

ベルン生まれの政治家。

法学研究の後，1795年秋に友人フィッシャーと共にイエナ大学に入学する。ヘルバルトと親交を結び，1796年10月頃にはヘルバルトやフィッシャーと共にシェリング研究に打ち込んでいる。1797年春には北ドイツとオランダを経由してパリに行き，祖国スイスへの危機感を強める。1798年4月，スイス革命直後に建設されたヘルヴェチア共和国の書記長に任命されるが，政争に巻き込まれ二ヶ月後には解雇される。その後1803年にベルンの州議会委員に，さらに最高控訴審裁判所のメンバーに選ばれた。彼はこの裁判所で犯罪捜査学に没頭している。

ヘルバルトとシュテックは，イエナ大学時代のシェリング哲学研究仲間である。1796年10月頃，ヘルバルトはフィッシャー，シュテックと共にシェリ

ング研究に打ち込んでいる。この哲学研究が，後のヘルバルトの思想形成の原点となる。1797年4月にグリースとともにヤコービを訪問している。[20]

④　フィッシャー（Johann Rudolf Fischer, 1772—1800）

ペスタロッチーと交流のあったスイス出身の政治家，教育者。

友人シュテックと共に，1795年秋にイエナ大学に入学する。スイス出身の彼はシュネッペンタールの汎愛学舎に学び，文相シュタッパーの秘書であった。ヘルバルトが家庭教師としてスイスに滞在していた頃，彼は師範学校の設立によってスイス国民の教育を向上させる計画の実現に熱意を燃やしていた。ペスタロッチーに，ブルクドルフで教育の実践に取り組むきっかけを与え，また最初の助手であるクリュージを指導したのも彼である。

ヘルバルトの身近な人物の中で，彼はヘルバルトと哲学的な問題意識を共有していただけでなく，教育に最も関心のある人物であった。1801年10月，ペスタロッチーは『ゲルトルートはいかにしてその子を教うるか』を出版する。フィッシャーの存在がペスタロッチーにとっていかに大きなものであったかは，この書の「第一信」にはっきりと書かれている。この「第一信」でペスタロッチーは，シュタンツでの疲れをフィッシャーの世話で癒すことができたこと，またフィッシャーが解釈した自分の教育原則を紹介し，その解釈を用いて自己の見解を詳しく述べている。けれどもフィッシャーはブルクドルフを去った直後，ヘルバルトの教育学的著作やペスタロッチーの活躍を見ることなく世を去る。[21]

彼は，ヘルバルトと教育を直接結びつけた重要な人物である。シュタイガー家の家庭教師としてヘルバルトをスイスへ招いたのも彼である。[22] また，ヘルバルトがスイスへの旅の途中で立ち寄った汎愛学舎の訪問，チューリッヒでのペスタロッチーとの出会い，さらにヘルバルトのペスタロッチーへの関心を決定づけたブルクドルフ訪問は，フィッシャーの存在なくしてはあり得なかった。

(4) 教育

① ツィームセン（Theodor Ziemssen, 1777—1843）

グライフスバルト（Greifswald）出身の教育者。ペスタロッチーと交流があり，何度もブルクドルフを訪問している。ヘルバルトの家庭教師の後任。1798年5月7日にイエナ大学に入学し，1799年2月11日にクラブに参加する。1799年の復活祭にヘルバルトの家庭教師の後任としてベルンに赴き，1803年まで滞在する。この間ヘルバルトとの頻繁な書簡のやりとりを通じて，子どもたちの教育について議論し，ヘルバルトの教育的関心を刺激し続ける。1804年に故郷のグライフスバルトで教員養成ゼミナールの指導者となっている。

彼は，1800年から1802年頃まで，ヘルバルトと頻繁に書簡のやりとりを続けながら，子どもたちの教育について報告し，ヘルバルトの指示を仰いでいる。この間ヘルバルトは，『ペスタロッチーの直観のABCの理念について』(1802)を出版しており，自らの教育学構想についてツィームセンに書き送っている。

(5) その他のメンバー

① リンダー（Friedrich Ludwig Linder, 1772—1834）

1791年イエナ大学に入学。グリースの友人。後にジャーナリストとなり，ハイネと親交を深める。

② クリューガー（Wilhelm Georg Krüger, 1774—1835）

リューネブルク出身。1793年の復活祭にイエナ大学に入学。ヘルバルト，グリースと並んで音楽家として有名となる。後にシュネッペフェンタールでザルツマンの教育施設の教師となる。

③ ブロィニング（Christoph von Breuning, 1773—1842）

ボン出身。ボン，イエナ，ゲッチンゲン大学で学ぶ。フィヒテの自然法について議論した友人。

④　シュピーゲル（Ludwig von Spiegel,1772-1797）

ブラウンシュバイク生まれ。1793年にイエナ大学に入学し，1795年にクラブに参加する。ヘルバルトがシュミットと親しくなったドレスデンへの旅行には，彼も一緒であった。

⑤　フローレート（Kasper Joseph Floret,?）

1793年にイエナ大学に入学し，1794年6月19日にクラブに入会している。詩的才能に恵まれ，ヘルバルトは彼の詩に曲をつけている。

4．おわりに

1790年代後半，ヘルバルトはこのメンバーたちとの交流を通じて，自らの思想形成を深めていった。フィヒテ哲学への懐疑，シェリング哲学研究と批判などの歩みには，常に彼らとの精神的な交流があった。

クラブのメンバーたちは，1790年代の思想状況の中で，フィヒテはもちろんヘルダーリン，シラー，ゲーテ，ヤコービらと交流を深めながら，自らの歩むべき道を模索していたのである。彼らの歩んだ足跡とヘルバルトの歩みを重ねるとき，彼らの生きた時代の雰囲気とともに，その息づかいが浮かび上がってくる。

本稿では，まずヘルバルトと関わったメンバーとの関わりを指摘することで，1790年代後半の思想状況の中で影響を受けたヘルバルトの人間関係を確認した。次回は，このクラブがどのような理念で創設されたのか，さらにそこでヘルバルトがどのような位置を確保したのかを確認する。

＜註＞

本論文中，引用及び参照したヘルバルトの論文は，すべて下記の全集による。またその末尾に全集の略号（K），巻数，頁数を示す。

J. Fr. Herbarts Sämtliche Werke, hrsg. v. K. Kehrbach, O. Flügel u. Th. Fritzsch, 19Bde., Langensalza 1887—1912, 2 Neudruck Aalen 1989.

(1) K.16—33.

(2) W.イェシュケ／H.ホルツァイ編，相良憲一・岩城見一・藤田正勝監訳『初期観念論と初期ロマン主義－美学の諸原理を巡る論争(1795-1805年)－』昭和堂1994年。(Jaeschke, W./Holzhey, H.: Früher Idealismus und Frühromantik, Der Streit um die Grunlagen der Ästhetik(1795-1805), Hamburg 1990.)

(3) ディルタイの最初の講義は，「1770年－1800年間のドイツでの試作的・哲学的運動」である。(Dilthey,W.:Die dichterische und philosophische Bewegung in Deutschland 1770—1800, 1867, in: Gesammelte Schriften V,12—17.)

この講義で取り上げた範囲に，ディルタイの「生の哲学」の原点がある。

(4) K.16-31.

(5) Flitner, Wilhelm.: August Ludwig Hülsen und der Bund der freien Männer, in: Wilhelm Flitner Gesammelte Schriften, Bd.5 1985, S.15-130.

ベルガーについての叙述については同書12頁以下を参照。

(6) 隈元忠敬「『全知識学の基礎』解説」隈元忠敬ほか訳『フィヒテ全集 第4巻初期知識学』哲書房 1997年，543頁参照。

(7) 正式の名称は，Literarische Gesellschaft der freien Männer（自由人文学協会）である。彼ら自身は，書簡では Literarische Gesellschaft，あるいは単に Gesellschaft と呼んでいた。例えばヘルバルトのシュミット宛の書簡を参照。Vgl. K.16-44. また，創設に関する最初の証言者はシュミットである。彼の記憶によれば，その創設は1794年の春「フィヒテの到着の少し前」であった。ただ明確にその設立が歴史に登場するのは，フィヒテがイエナに到着した直後の1794年6月1日の午後のことである。この日，様々な専門分野の学生たち10人が，「文学的なクラブ，あるいは自由な人々の Gesellschaft の設立について相談するために」集まっている。その創立の中心メンバーとなったのが，シュミットとベルガーである。なお，このクラブの創設に関する経緯については，以下の文献が詳しい。

Vgl. Marwinski, Felicitas: “Wahrkich, das Unternehmen ist kühn....” Aus der Geschichte der Literarischen Gesellschaft der freien Männer von 1794/99 zu Jena.Jena und Erlangen 1992, S.15—32.「フィヒテ・クラブ」とは，この最初の会合から名付けた筆者の通称である。

(8) とりわけ，1794年と1795年のイエナをめぐる思想状況については，以下の文献が詳しい。

Vgl. Ziolkowski, Theodor: Das Wunderjahr in Jena. Geist und Gesellschaft 1794/95. Stuttgart 1998.

(9) ここで紹介する人物については，基本的にはケールバッハ編の全集に収められて

いる書簡集の筆者の分析に基づいている。Vgl. K.16-6～128.

(10) 1800年8月23日，ベルンのツィームセンからヘルバルトに宛てた書簡には，そのことが詳しく述べられている。また，この書簡では1800年5月4日になくなったフィッシャーのことについても触れられており，「エッシェンもまた，フィッシャーの後を追った」とある。Vgl. K.16—167.

(11) K.16—64～66. この書簡で，エッシェンはイエナにおけるクラブの状況を述べながら，フィヒテの自然法を受講していることなども述べている。

(12) ここで取り上げた人物のうち，グリース，ヒュルゼン，ベルガー，ムアベック，ケッペン，シュミット，リスト，シュテックについては，以下の文献を参照した。

Vgl. Allgemeine Deutsche Biographie, Bd. 1-56. Duncker& Humbolt, 1875—1912.

Gries: : Bd.9-658～660. Hülsen : Bd.13-333. Berger : Bd.2-376.
Muhrbeck : Bd.22-485. Köppen : Bd.16-698～699. Smidt : Bd.34-488～494.
Rist : Bd.28-650～651. Steck : Bd. 35-540～541.

(13) K.16-103～112. この書簡で，グリースはフィヒテよりはむしろヤコービに共感している。この長い書簡は，当時の彼らの議論が凝縮されており，さらに詳細な分析が必要である。

(14) Biographisch-Bibliographisches KIRCHENLEXIKON, Band XX 2002, Traugott Bautz, S.221—234.

(15) K.19—108.

(16) 1796年6月27日のシュミット宛の書簡。この長い書簡には，ヘルバルトの母親について，またベルガー，ヒュルゼン，リスト，グリースらと試みたワイマール旅行の熱狂とともに，フィヒテ哲学への明確な批判が述べられている。K.16—108.

(17) 1798年7月28日のヘルバルトあての書簡では，ヤコービの理論とヒュルゼン，ベルガー，ヘルバルトの思想的差異について述べている。K.16-66～68.

1796年の12月初めのシュミット宛の書簡で，初めてヘルバルトはムアベックについて言及してる。最近の「フィヒテ・クラブ」の停滞の中で，唯一の例外的な素晴らしい人物として，ムアベックをシュミットに報告している。K.16—44.

また，1797年6月14日のシュミットの書簡には，彼がヘルバルトと「意志の自由」について議論したと書かれている。K.16—64.

(18) K.16—66～68.

(19) ヘルバルトは，自らの転機の節目では必ずリストに書簡を送り，詳しい状況について述べている。例えばイエナからの旅立ち，家庭教師として赴任しての状況などである。Vgl. K.16-55, K.16-60～62.

(20) 拙著『初期ヘルバルトの思想形成に関する研究』風間書房 2001年，151頁以下参照。

(21) フィッシャーとヘルバルトの関係については，以前詳しく論じた。
拙稿「ブレーメン時代のヘルバルト」『神戸外大論叢』第52巻 第4号2001年，33～35頁参照。

(22) 1797年2月11日，シュテックの母親宛の書簡に，ヘルバルトがフィッシャーからの家庭教師の申し出を引き受けたことが述べられている。K.16—47—48.